

衛尉憲清法師也とあり、又同書に、名字時連五郎と見えたるなどを思ふに、おほよそ八百させのむかしよりは、すべて正しき氏のほかなる氏、正しき名のほかなる名をひとつにつらねて、あざなども名字ともいひしにぞありける、されど事のよしを考ふれば、中頃よりの名字は、その人のすみ所の庄名のなによりて、氏のやうなるものをものして、玄かいひしぞ多き、さるは同じ氏のあまたになりて、まぎらはしきゆゑにぞありけん、高綱が氏は源にて、近江の佐々木にゆつれば、佐々木四郎高綱といへるにて、玄るべし。むかしは郡のうちに某名といふありきか、ればあざなど名字とは、わきていふぞ正しかるべき、たれもさおもへばにやあらん、今の世には、名字とは、氏のほかなる氏をのみいへりしか、わきていはんには、名のほかなる名をあざなどいふべし、今昔物語に、字太郎介、又は京大夫などいへるは、今の世のあざなど同じいひざまなり。

〔年々隨筆三〕いにしへは、中書王、儀同三司などやうに、めでたき文人といへども、その道の人ならぬは、字といふ物はつく事なかりつゝみえて、すべてきこえず、源氏物語少女卷に、夕霧のおどりの六位にておはしまし、頃字つくる事を、二條の東院にて玄給ふ事ありて、そのさはふいかめしげにみゆるは、身のほどくにつきて、うるはしうしてつく事なるべし。さるは此君大學の衆になり給ひつる故に、字もつき給ふにこそありけれ、玄かるを今の世は、よろづそぞろきて、けふ書よみそむるより、やがてつくなる、打聞ば物々しく博士めきて、その實はまだ難波津淺香山のほどなるは、戯だちてをこがましき事也、かくてから國の字は、みな二字なるを、皇國のは、多くは一字にて、舊三文琳などやうに、姓を加へて二字なり、ゆゑある事なるべし。玄かればかの難波津も、一字こそつくべきに、さる故實は玄らずして、なほ二字をのみぞつくなる、そもそもあざなどいふ義は、いかなる事ならん、此から流のを除て、實名ならぬ名のりを、みな字といふめり、今昔物語に、字太郎介、字澤殷四郎などいふがみえたるは、今時の俗名のさま也、日本靈異記に、字上田三